他と共なる命

奨励	小﨑　眞〔こざき・まこと〕
奨励者紹介	同志社女子大学宗教部長 同志社女子大学生活科学部教授 日本キリスト教団牧師

「はっきり言っておく。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。自分の命を愛する者は、それを失うが、この世で自分の命を憎む人は、それを保って永遠の命に至る。わたしに仕えようとする者は、わたしに従え。そうすれば、わたしのいるところに、わたしに仕える者もいることになる。わたしに仕える者がいれば、父はその人を大切にしてくださる。」

（ヨハネによる福音書　12章24―26節）

はじめに

今夕は同志社大学のチャペルにお招きいただき、感謝申し上げます。さて、多様化が進む社会状況の中で、さまざまな生き方やあり方をお互いに肯定し合う挑戦が続いています。一方、差異による分断と排除を正当化する論調があることも否定し得ません。先日のアメリカにおけるユダヤ教への襲撃や渋谷での興奮状態などは、差異の分断や排除の例と言えます。自身が置かれている状況の変化を的確に把握しつつ、「分かりやすい」説明や世界観に安住することに対抗する姿勢を身に付けることが必要であると感じております。今週は「同志社スピリット・ウィーク」とのことです。同じ志の結社として歩んでいる「同志社」が何を問われているのか共に考えて参りましょう。

私が勤めております同志社女子大学では２０１８年度の年間テーマを次のように決定しました。「愛をもって、他者を敬い、未来を築く」。今日的時代状況に鑑み、異なる他者に心を披（ひら）き、その差異を尊重し、共に未来を創りたいとの願いを込め、各学部選出の多様な宗教主任の先生と対話を深め、このようなテーマを創出しました。「愛をもって」との表現は、新島襄がキリスト教の説明に用いた「愛以貫之」の一部を用い、文頭に掲げました。

愛、そして一人は大切

「愛以」との言葉表現に新島はどのような想いを込めたのでしょうか。日本において、「愛」は恋愛や愛欲といった文脈で用いられ、「ものをむさぼり執着すること」という否定的意味を含んで理解されてきたようです。一方、イエズス会の宣教師バレトは「敵を愛せよ」というイエスの教えを「我が身に仇をなす人には、なお大切を以て報ずる道なり」と、表現しています。すなわち、「愛」という言葉を避け、「大切」と表現していることに気づかされます。

新島自身も「諸君よ人一人は大切なり、一人は大切なり」と、「大切」という言葉を尊重したようです。校則に背いて退学させられた数名（一説には７名）の学生を想起して、新島は「一人は大切なり」との言葉を発しました。奇しくも、新島のアメリカ帰国を待って開催された「創立10周年記念式典（１８８５年12月18日）」の式辞の冒頭の言葉でした。当時の在学生や卒業生に対して「大切」と語られたのではないところに、新島の愛の深さを感じます。新島は退学を余儀なくされた学生たちのことを一人ひとり想起しつつ、「人一人は大切」と語りました。同志社に「ふさわしくない」者、認められない者として排除された学生に対して、「大切」との眼差しを向けました。同志社や新島襄自身にとって、思い入れの強い、「かけがえのない一人」という視点ではなく、不都合で、できれば隠したい、忘れたい存在として否定的な評価を受けた学生に対する、新島の強い関心です。同志社にとって同じ志の側でなく、向こう側へ追いやられた学生、同調関係から疎外された学生、厳しい表現を使うなら反対勢力の学生に対して新島は心を傾けました。同じ志の結社ゆえに起こり得る、同じことへの絶対化、自分たちの側への特別意識に新島は気づいていたのかもしれません。「人一人は大切」とは、自分にとって排除したい異質と思える他者を愛することであり、異質なものとして同調から排除されている者に対して大切な思いを寄せることを示唆します。言い換えれば、自分にとって異質なものとの出会いと対話をとおしてこそ、自分自身の絶対的な正しさから解放され、新しい自分自身への覚醒が創出することを宣言しています。さらに、新島に学ぶのであれば、あえて「傷（傷メル葦）や弱さ（煙レル麻）」を大切にすることが「愛」であるのかもしれません。自分自身が避けたい異質性を尊重し得る自由（真誠の自由）を大切にしたいものです。

「一粒の麦」を見つめて

冒頭にお読みいただいた「一粒の麦」として語り出される聖書の世界は、新島の思想に通底しているように思います。注解書によれば、「一つ」という麦の「数量」への注視ではなく、「麦」の資質への関心を表した言葉のようです。「麦」は目立たない植物であり、人々に踏みつけられる存在でもあります。その踏みつけられることをとおしてこそ、麦の表面が変容し、その中から新しい芽が息吹き、成長していくようです。この麦の特性に注目し、イエスのみならず人間の命の有り様を示唆したのでしょう。

また、「自分の命を愛する」とは、「自身の生命力や自身の活力としての生命にしがみつく姿勢」を表し、自身へ閉塞する姿勢の中で、自らを見失う結果へと陥ることが指摘されています。一方、「自分の命を憎む」とは、単なる自己否定の律法として語られているのではなく、イエスに従うことを前提にしています。すなわちイエスへの献身ゆえに、自身の命をなおざりにすることを意図し、結果、自身の外から新たな命が与えられる事実が宣言されています。主イエスによる「生命の交わり」に加えられるという大いなる肯定の中で、私たちは自己否定を求められています。「一粒の麦」の語りは、誰しも踏みつけられ、殻が破られる（自身の有り様が解体される）ことにより、新たな生命へと導かれる真理への招きが語られていると言えます。

神学部の教職科目（宗教科教育法Ｂ・Ｃ）を担当させていただいていますが、毎年、受講生をとおして多くの刺激を与えられています。先日、ある受講生が、旧約聖書に描かれる「異邦人」に関心を寄せつつ、以下のごとく発表をまとめました。

イスラエルは自らの正しさを絶対化せず、他者によって自身の規範が書き換えられ、その価値観が更新されることを許容し、己よりも「正しさを体現する主体」を想定することで選民たり得てきた。

またイスラエルを選び出された神もその求めるところの正しさを彼らによってだけではなく、しばしば異邦人をとおしても表現された。

イスラエルが、自身と異なる文化に生きた人々との出会いの只中に、自身の規範の書き換えと更新を許容したことを発表者が読み解いた洞察の深さに感銘を受けました。

結語

今夏、偶然に「小田原おでん」の魅力に出会いました。小田原城主の北条早雲は、武力により所領拡大を図った人物として理解されがちであります。確かに、その姿勢は否めません。しかし自身の欲望のためではなく、当時の社会情勢に鑑み、誠実な状況判断に基づいた結果であったと言われます。事実、早雲は農民の負担に鑑み、年貢を軽減し、戦意がない者に対して攻撃を続けることはなかったと言われています。早雲が京都の大徳寺で禅を学んだ所以（ゆえん）かもしれません。このあたりに京都の食文化ともいえる「薄味の出汁」が小田原おでんへ影響を与える一因があるのでしょう。

おでん屋さんによると、出汁が薄味であることにより、出汁と異なるタネ（魚の擂り身）を活かすことができるとのことです。さらに異なるタネとの融合により、出汁がより美味しくなるようです。同調圧力から解放されることで他が活きるのかもしれません。自分という枠組みが解体される時、その只中に他との新たな出会いが創出するのでしょう。

自分のこだわり（自分の正しさ、絶対性）からの解放は他が活きることを導きます。また、自己完結の思いから解放されすべてを明け渡すことは、他によって支えられている事実と謙虚に向き合うこととなります。さらに、自己の限界を認めることは、他によって新たに活かされる真理へと導かれます。聖書に描き出される時間や空間の中で、私と同調し得ない異なる他者と出会っていきたいものです。その出会いの只中にこそ、私たちを「真」に自由にする同志社に脈々と流れてきたキリスト教主義教育の本質を見いだすことができるのかもしれません。

〔参考文献〕

新島襄全集編集委員会編　『新島襄全集』１　同朋舎出版　１９８３年
新島襄全集編集委員会編　『新島襄全集』４　同朋舎出版　１９８９年
小田原市ホームページ　http://www.city.odawara.kanagawa.jp/kanko/hojo/p09008.html２０１８年10月20日参照

２０１８年　10月30日　同志社スピリット・ウィーク秋学期
今出川火曜チャペル・アワー「奨励」記録